様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 21 年 6 月 10 日現在

研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2007～2008
課題番号：１９６１１００６
研究課題名（和文）　歴史系博物館における生涯学習プログラムの開発と評価に関する学際的研究

研究課題名（英文）　Interdisciplinary Study of Evaluation and Development for Lifelong Study Program in History Museum.

研究代表者
谷　直樹(TANI NAOKI)
大阪市立大学・大学院生活科学研究科・教授
研究者番号：４０１５９０２５

研究成果の概要：
少子高齢社会の到来とともに，地域の歴史や昔の暮らしに対する関心が高まり，歴史系博物館における生涯学習支援がクローズアップされている。そこで,先進館でのリサーチをふまえ，子ども・大学生・高齢者の世代モデルプログラムを開発し，大阪市立住まいのミュージアムの展示室で実施し，その効果を評価した。その結果，子どもと高齢者向けの学習プログラムは概ね良好な結果を得ることができた。いくつかの点で今後に課題を残したが，全体として所期の研究目的を達成できたと考えている。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００７年度	2,200,000	660,000	2,860,000
２００８年度	1,200,000	360,000	1,560,000
年度			
年度			
年度			
総　計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：時限
科研費の分科・細目：細目：博物館学
キーワード：博物館学・生涯学習

１．研究開始当初の背景

全国の博物館数は 5,600 館，利用者数は延べ約 2 億 7 千万人にのぼり，国民一人当たりの年間利用者数は 2.1 回になる。この数値は，博物館が市民にとって身近な生涯学習施設であることを示している。とくに近年，動物園や水族館が大きく変わり，見せ方の工夫や経営努力によって，来館者の満足度の高い施設としてマスコミで報じられるようになった。1 館あたりの年間平均利用者数は水族館が 42 万人，動物園が 31 万人に達している。

これに対して，博物館の大半，約 68%を占める歴史博物館の利用者数は 2 万 4 千人に過ぎない。歴史系博物館の人気が低いのは，扱う資料が地味で，動物園や水族館のように動きがないことを差し引いても，「お勉強」の場というイメージが強く，市民の遊び心に応える努力が不足していたことも考えられる。

しかし，高齢社会の到来とともに「昔の暮らし」や地域の歴史への関心が高まり，子どもたちはもちろん，高齢者の生涯学習支援もクローズアップされ，さらに，いわゆる「2007 年問題」とともに，団塊の世代への対応も喫緊の課題として浮上してきた。

こうした背景の中で，歴史系博物館における生涯学習プログラムを開発し，その効果を評価することは，今後の歴史系博物館の活動を活性化させる点で重要であると考え，本研究を構想した。

２．研究の目的

本研究では，歴史系博物館における活動の3 本柱（展示活動・普及啓発活動・資料収集と保存）の中で，展示活動，とりわけ常設展示の活性化に着目した。現在の博物館は企画展示で集客する仕組みが定着しており，そのために名品主義が横行している。一方で常設展示は，開館時に巨費を投じたにもかかわらず，いつ行っても変り映えがせず，地味で面白くないものとされている。このため常設展示は市民からも学芸員からも注目されず，積極的な活用には程遠い状況にある。また，普及啓発活動との連携も不十分である。

そこで，本研究では，常設展示と企画展示とからなる展示活動に焦点を当て，各地の歴史系博物館の典型事例を踏まえて，展示における生涯学習支援プログラムを開発し，その効果を評価することを目的としている。

３．研究の方法

研究の方法は，最初に歴史系博物館における「常設展示活動」「企画展示活動」「教育普及活動」の先進的生涯学習プログラムを調査した。これと並行して，歴史系博物館における生涯学習プログラムとして，大阪市立住まいのミュージアムの常設展示室を使って，①子どもを対象とする学習プログラム，②大学生を対象とする学習プログラム，③高齢者を対象とする学習プログラムを企画・実施し，それぞれのプログラムの教育的な効果をアンケートやヒアリングなどによって評価した。さらに，子ども･大学生･高齢者の交流を促す学習プログラムの仕掛けや，地域のまちづくり学習との連携による学習プログラムの可能性を考察した。

４．研究成果

（１）歴史系博物館の生涯学習支援の現状

歴史系博物館における生涯学習は，普及啓発活動と展示活動（常設展示，企画展示）に分類できる。普及啓発活動は，講演会，講座，講習，体験学習などが一般的で，全国の博物館で実施されている。また近年はボランティア活動を導入する館が増え，ボランティア活動自体がすぐれた生涯学習活動になっている。

①子ども向けの学習プログラム

小学校3年生の「昔のくらし」単元を対象にした学習プログラムがある。これは小学校の授業の一環で，博物館の本来の教育機能を活用したものである。とくに体験学習は，考古学や民俗学の分野で豊かなプログラムが実施されている。

②高校生や大学生向けの学習プログラム

この世代は，博物館の利用が最も少なく，積極的なプログラムを持っている博物館は少ない。ただ，学芸員実習の中で，企画展を実施した福井県立博物館と福井大学との連携活動が注目される。それは，2003 年の「コラボレーションギャラリー　缶 CAN 展」,2004 年の「コラボレーションギャラリー 魅惑の紙箱展 箱ワンダーランド」，2005 年の「コラボレーション企画展 ラリックからラムネ瓶まで ビン。展」である。いずれも博物館実習の学生と学芸員との共同企画で，実習生がテーマの設定，展示名称の検討，資料の収集，展示資料に関する歴史やそれに関連した調査，イベントの企画，広報物の作成など，通常の企画展示並みの準備作業を行っている。単なる知識伝達の博物館実習ではなく，展覧会の開催として結実したことが大きな成果である。

③成人向けの生涯学習プログラム

成人向けでは，講演会や歴史講座，古文書講習などが行われており，歴史ファンの層をつかんでいる。近年は，高齢社会の到来とともに，博物館利用者のなかでも高齢者の比率が増えている。これは自治体による高齢者無料パスなどの施策によるところが大きいが，退職後に時間的な余裕ができて博物館に足を運ぶ人も多い。

このような背景から，成人向けの生涯学習活動の中で，博物館ボランティアが重要な柱になりつつある。従来の博物館では「友の会」活動が中心であったが，さらに自発的で参加型の博物館活動に発展している。その内容は，展示室の監視や会場の準備・後片付けから，資料整理や体験講座の補助，さらに自主的な活動の企画・運営プログラムなどで，さまざまな活動が試行的に行われている。

④高齢者向けの生涯学習プログラム

高齢者対応の博物館活動として注目されるのは，回想法を取り入れた認知症予防に向けた活動である。博物館活動と回想法を結びつけた先駆的な館は，愛知県の北名古屋市歴史民俗資料館（旧師勝町歴史民俗資料館）である。ここでは，早くから昭和 30 年代の資料収集に取り組み，企画展を開催してきた。さらに，資料館と連携する形で回想法センターを立ち上げ，地域の認知症予防プロジェクトを推進してきた。現在は回想法グループ修了者も多く，いきいき隊として様々な活動を展開している。例えば，保育所や幼稚園などの子どもとの交流行事の中で昔の地域の様子や，伝承遊びを伝える活動要請が多いとのことであった。引きこもりがちであった高齢者がグループ回想法の活動ののち，地域活動に繋がる先駆的実践を行っている。同様の事業は，岐阜県恵那市明智町でも行われ，以前は産院であった施設を回想法センターとして活用し，

想い出学校として地域と連携した形で実践が行われている。

千葉県の龍ヶ崎市民俗資料館では，龍ヶ崎市回想法センターと連携して，70～90 代の回想ボランティアを中心とした活動を展開している。毎月，民俗資料館内での活動日を設定し，広報活動を通じて来館した高齢者や地域住民を対象にネットワークを形成している

博物館独自の回想法プロジェクトもある。江戸東京博物館では，「高齢者元気プロジェクト」を立ち上げ，博物館を使った介護予防プログラムへの取り組みを行った。地域の地図を見ながらグループで回想を行い，「記憶の地図」を作成するというものである。最初は戸惑った高齢者の方々も，作業を進めるうち，中断することなくこのプロジェクトに楽しんで参加したとのことであった。館内の体験コーナーとして設置されている昭和 30～40 年代の家屋の中で当時の日常生活を想い出しながらのグループでの作業は，回想を促し，忘れていた記憶を蘇らせる仕掛けとなったようである。

⑤常設展示室を活用した生涯学習プログラム

歴史系博物館の常設展示は，通史や歴史上のテーマを取り上げたもので，固定的で，来館者の参加する余地が少ないものが多い。体験学習やワークショップは，学習室で行う館が多く，常設展示室を活用する館はきわめて少数で，かつ限定的である。しかし，常設展示室は広い面積を占め，開館時には莫大な費用を投資していること，さらに博物館へのリピーターを増やすことなどを考えると，常設展示の活用が必要である。全国的に都道府県立・政令指定都市立の博物館を調査した結果，長崎歴史文化博物館，熊本市立博物館などで常設展示を活用した催しが行われているが，まだ少数にとどまっていることが分かった。

（2）子ども向け学習プログラムの開発と評価
－大阪市立住まいのミュージアムをモデルにして－

①プログラム開発のねらい

住まいや住生活の変化とともに，日本の伝統的な暮らしの中で育まれてきた住文化が姿を変えたり，失われつつある。障子を貼り替える，座敷をほうきやはたきで掃除する，季節に応じてしつらいを替えるなど，かつてはごく普通に見られた日常生活の光景が，現在では珍しい，懐かしいものになってきている。

このような中で，日本住宅のアイデンティティの根底となる住まいや暮らしの文化を継承していくことは重要と考えられる。しかながら，既に伝統的な住まいや住生活を体験的に学習する場を得ることが困難になっている大都市圏では，その対応が課題となる。

歴史系博物館は，農家や町家の再現展示や町並み模型，昔の生活用具など，住まい学習の実物教材となる展示が豊富であることから，住文化学習の場として展示室の活用が考えられる。そこで，江戸時代の大坂の町家と町並みを実物大で再現した大阪市立住まいのミュージアムの展示室において，住文化体験型のプログラムを開発した。

すでに指摘したように，博物館の来館者のうち，最も少ない年齢層が大学生を中心とする若者である。そこでプログラムでは，計画段階から実施の大半を学生の主体的な活動や工夫に任せ，教員や今昔館の学芸員は基本的事項を確認し，学生たちの企画をサポートするにとどめた。大学生に博物館に関わってもらう場を創出することで，大学と博物館の新たな連携のあり方をさぐることが第二の目的である。

住まいのミュージアムでは，2001 年の開館以来，町家衆と呼ばれる博物館ボランティアによって，館内の江戸時代の町並みをガイドする町家ツアーのほか，着物の着付け，障子貼り，お茶会，むかしの遊び，などの体験型の学習支援活動を単独のプログラムとして行ってきた実績がある。

町家衆のメンバーは高齢者が中心である。そこで，体験メニューの実施に必要な浴衣の着付けや障子貼りなどの技術は，生活経験豊かな町家衆から大学生に指導してもらい，それを教わった学生が先生役になって参加した子どもたちや保護者に伝える仕組みをつくることにした（図 1）。すなわち，このプログラムを通じて，子ども，保護者，大学生，高齢者の多様な年齢集団が博物館を舞台に相互交流し，教え合い，学び合う仕組みをつくることを試みた。異世代間交流によって，住まいや暮らしの文化を伝承する仕組みを織り込んだ学習がねらいである。

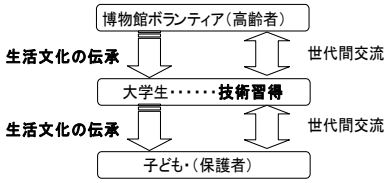

図 1　　世代間交流と生活文化の伝承

②住文化体験プログラムの概要と評価

2007 年 8 月 22・23 日の 2 日間，小学生の親子を対象に 1 日 15 組を募集し，大阪市立住まいのミュージアムの子ども向けイベントとして，住文化体験プログラムを実施した。昔の子どもの一日の暮らしぶりを疑似体験できるように，13 時からミュージム閉館後の 20 時までの長時間に渡って実施したことが特色である。参加した子どもたち全員に浴衣を着用してもらい，江戸時代にタイムスリップした感覚で，町並み歩き，座敷でのお茶会，昔の遊び，竹細工，障子のはり替え，町家のおそうじなどを，一日の暮らしの流れをイメージで

きるように連続して体験してもらった。さらに，昔の夜の町の暗さや不気味さを体感してもらうために，ミュージアム閉館後に館内の照明を消して，親子で肝試しを体験してもらった。

上記には，プログラムの企画段階から大学生に参加してもらい，当日の運営も大学生主体に行った。

表１　　体験メニュー

体験メニュー	主　旨
1. 浴衣の着用	浴衣を着用し、昔の子どもになって一日を過ごす
2. まち探検	町家や町並みを巡り、伝統的な住まいを体感する
3. お茶会	座敷に座って、お茶の文化を知り、お作法を体験する
4. むかしの遊び	遊びを楽しながら、昔の遊びの種類や工夫などを知る
5. 竹のお箸づくり	お箸づくりを通じて、住宅や生活用品に使われる竹の性質を学ぶ
6. 町家のお掃除	座敷ほうきやはたきの使い方を学ぶ。昔のそうじの工夫を知る
7. 障子貼り体験	障子貼りを通じて、住まいのメンテナンスを知る
8. むかしのおやつ	竹細工でつくった箸を使って、素朴なおやつの味覚を味わう
9. 肝試し	電灯のない時代の町の暗さを体感する

体験プログラムの評価をまとめると，体験終了直後に，子どもたちに書いてもらった感想は，2 日間で 45 人分であった。「きもだめしがめちゃくちゃこわかった。ないてしまった」「はじめてほんとうにこわいきもだめしがたいけんできて，おもしろかった」「おばけやしきこわかった。びくびくしたよ」など，98％の子どもが肝試しのことを取り上げた。「お茶会ではじめてまっ茶をのんだけど，へいきだったよ」「ゆかたは，しっかりきてみたことがなかったので，よかったです」「ゆかたをきたことや，しょうじはりができてよかった」など，他の体験の感想も多数みられたが，肝試しの興奮がまだ続く中で感想を書いてもらったので，その刺激が非常に強かったと考えられる。

一方，保護者からは，「親子で体験できるのがとても楽しく，親もしたことがない事が体験できるのがおもしろかった」「子どもたちの親も楽しく過ごせました。普段体験できないお茶会や，竹のお箸作り等，貴重な体験をさせていただいてすごくよかったです」など，保護者自身もしたことがないことを体験できたことを述べる感想が多かった。子ども中心に企画したプログラムであったが，小学生の保護者世代の年齢の大人にとっても学びの場となったことが窺えた。

次に，このプログラムの中の体験が，子どもたちの日常生活に少しでも定着したのかをみるために，1 週間後に，子どもたちには絵日記を，保護者には自宅での子どもの様子を書いてもらい，郵送してもらった。

絵日記の絵と文章に表現された内容をみると，体験直後の感想で殆どの子どもが書いていた肝試しは30 数％～40％に減少し，その分，浴衣や竹のお箸づくり，障子貼りなどの体験の記述が増加した。

また，保護者に書いてもらった自宅での子どもの言動では，「家に障子がないので昔の人は大変なことをしていると感心していました」「テレビで障子が映ると紙の貼り方を正確に説明します」「竹のお箸ですぐにご飯を食べて家族に自慢していた」や，「ここのほこり，はたきがあれば届くのに･･･家にないの？」「どうして，家にははたきがないの？と聞かれて，しかたなく売っていないと答えました」などから，今回の住文化体験プログラムが子どもたちに受け止めてもらえ，日常生活にフィードバックさせるきっかけづくりになった様子が窺えた。

③展示室でのお泊まり体験プログラム

前述のプログラムを発展させ，2008 年 11 月，小学生と保護者 10 組のモニターを対象にして，住まいのミュージアムの再現町家で夜の町家とお泊まり体験プログラムを実施した。

夜の町家体験では，展示室内の町並みを，参加者に提灯を持って夜回りしてもらい，町家の戸締まりの工夫を体験してもらった。お泊まり体験は，家族ごとに町家の座敷などに分かれて，翌朝まで宿泊してもらった。

プログラム終了後に，保護者に子どもたちの様子などを記述してもらったところ，「町家の夜回りや宿泊は，日常の生活やホテルの宿泊では味わえないことで，子どもも関心をもてた」「大人もたいへん関心を持てた」など，日常では味わえない特別な体験への評価が高かった。小学校 1 年生など低学年の子どもにとっては，町家は時代劇の場というイメージや，薄暗くて怖いという感想もみられた。

宿泊を伴う体験プログラムは，受け入れ可能な人数が限定され，スタッフの負担が大きいことや安全性の確保などの課題を抱えるが，むかしの建物や暮らしを特別に体験できる点で参加者の満足度が高い。博物館の展示室を活用した体験学習プログラムのあり方の一つとして，さらに検討する余地があろう。

（３）学生向け学習プログラムの開発と評価

①建築系学生の学習プログラム

歴史博物館では，日本の伝統的な生活文化や技術の継承が課題になっている。そこで，伝統的な木造住宅の軸組構造模型を制作し，その組み立ての過程を体験するプログラムを企画した。柱や梁，束などの名称を覚え，その役割を理解しながら組み立て作業を行うプログラムは，参加した建築系の学生からは好評を博した。しかし，一般の学生に対するプログラムとしては専門的に過ぎるとの批判があり，今後，さらに改良を加えた新しいプログラムの開発が課題となった。

②留学生向け住文化体験プログラム

同じ学生でも，留学生向けの学習プログラムを開発した。わが国への留学生数は，1983 年に打ち出された「留学生 10 万人計画」が 2003 年に達成された後も増加し，日本学生支援機構によると 2008 年度は過去最高の 12 万

3800 人余りに達した。さらに 2020 年を目処に，留学生 30 万人の受け入れが目指されている。

このような状況の中で，留学生に日本の伝統文化を学んでもらうことも，歴史系博物館の役割の一つと考えられる。そこで，本研究では，2008 年 10 月に日本語専門学校の留学生を対象としたプログラムを実施した。なお，プログラムは，11 時から 17 時にかけて，表 2 のように実施した。お茶会や障子貼りなどは，日本人学生が外国人留学生に指導する形のプログラムである。

表 2　体験プログラム

1．昔の生活道具の体験学習（午前）
2．和服を着る
3．昔の遊びと自由撮影
4．お茶会
5．障子張り
6．町家ツアー
7．アンケートの実施

プログラム終了後にアンケート調査を行ったところ，このプログラムによって日本の伝統文化について「大変勉強になった」という回答が 75%を占め，「少し勉強になった」25%を含めると，参加者全員に日本の伝統文化の勉強になったと感じてもらうことができた。

体験したプログラムの中で，最も興味を持った体験は「和服を着ること」80%で，「町家ツアー」「お茶会」はそれぞれ 70%を占めたが，「障子はり」は 20%の回答しかなかった。留学生は障子に馴染みがないので，よく理解できなかったものと思われる。

今後の留学生向け体験学習プログラムへの意見を尋ねたところ，「もっと多くの体験がしたかった」70%，「一つ一つの体験をもっと時間をかけてしたかった」45%のように，さらに充実した内容を求める意見が多かった。

③生活文化の継承と学生の役割

博物館における学生の役割として考えられるのは，子ども向けのプログラムで，指導者と子どもの間にあって，両者の橋渡し役である。とくに住文化体験プログラムは，住まいと暮らしの伝統文化をテーマとしているので，まずは学生自身が伝統的な生活文化を学ぶところから出発しなければならなかった。このことに対する学生の感想をみると，「自分自身が障子張りの仕方を教わりました。自分で子どもたちに教えられるよう覚えるのに必死でした」，浴衣の着付けでは「まず着物に馴染みがないのでどんな小物がいるのかが分からなかった。ボランティアさんに着付け講座をしてもらい，着付けを覚えた」という記述が見られ，生活経験豊かなボランティアとの協働によってプログラムが実現できたことを学生自身が実感したようである。

お茶会を担当した学生は茶道部に所属していたため，茶道についての知識は問題がなかったが，「子ども向けのお茶会を開くのは，ほとんどはじめての経験だったし，実際の茶会とかなり勝手が異なるので，（人数，道具，進行の点で）本番でどうなるか予想がつき辛かった」と述べ，単に知識があるだけでは，子どもに教えることが困難であることを認識したようである。

その他，学生たちの感想文には，博物館のボランティアの熱意と豊かな生活経験の蓄積に対する驚き，立場が異なる人との協働によって一つの企画を作り上げたことへの達成感，子どもや保護者とうまく接することができるかという不安とそれができた喜びなどが記載されていた。

以上から，高齢者を中心とする博物館ボランティアの協力を得ることで，高齢者が持っている伝統的な生活技術や文化を大学生や子どもたちに伝えることが可能となり，世代を超えた住文化学習ができることが示唆された。

（4）高齢者対象の回想法プログラム

高齢者を対象としたプログラムについては，グループ回想法を行った。2007 年度，2008 年度の 2 年間に 3 回（2007 年 10 月 5 日，2008 年 2 月 22 日，2009 年 1 月 30 日）実施した。

本プログラムは通常，高齢者施設内で行われている 10 回のグループ回想法のうち 1 回を博物館の常設展示場を会場として行ったものである。

手続きは以下のように行った。高齢者とスタッフがペアリングを行い，自由に館内の常設展示室を見学後，前栽のある会所展示室の部屋の中でグループ回想法を行った。このグループ回想法においても，おひつ，ふご，火鉢，煙管等，実際の展示品を小道具として用い，触れながら進行した。常設展示室には，町並みという空間そのものが展示されているため，高齢者にとってはタイムスリップしたような感覚になり，町並みの物干し台や路地の雰囲気，長屋や井戸，路地に立てかけられた張板などがそのまま回想の刺激となった。例えば，自身の母親がしていた家事や路地での井戸端会議の様子，その母親への思いなど，通常のグループセッションでは話されなかった回想が，深い情緒を伴って初めて語られる場面が多くみられた。

次に，見学後行ったグループ回想法での参加者の具体的な反応を示す。（以下グループの観察記録より）

スタッフ：今日はいつもと違うこういう場所で，ちょっと雰囲気も違います。皆さんいかがでしたか？

参加者 1：楽しかったです。本当に楽しかった。懐かしいものばかりです。

スタッフ：何が懐かしいでした？

参加者 1：もう何もかも。この廊下も，こういうのも（手水鉢とタオル），庭（前栽）も経験しているしね。

参加者 2：われわれはジャリ（子ども）の頃を思い出しました。
参加者 3：私，里を思い出しましたわ。前栽を見ていたら。
参加者 4：屋根の上に物干しがあるでしょう。物干しの上にござを敷いて，おもちゃを出して遊びました。

以上のように，セッション開始後すぐに，懐かしさとともに，回想が次々に語られた。

高齢者に同行した家族からは，「ここに来て，昔どんなものを使っていたのか，初めて聞くことができたし，実際に見ることができ，貴重な体験になった」という感想が述べられた。展示室内の道具によって，高齢者の回想がより具体的に伝達されたと考えられる。本プログラムを博物館内で実施したことについて，翌週の会の際にインタビューしたところ，ほとんどの参加者とその家族が「よかった」と答えた。

このように，住まいのミュージアムの常設展示室に再現された伝統的な町並みの中で行った回想法は，公民館の１室などで行う回想法に比べると，話が大きく展開し，グループの進行に効果的であった。

グループ回想法の効果については，回想法参加前と参加後に認知機能評価（HDS-R，MMSE）と投影法（Rorschach test）を用いた評価を行った。その結果，認知機能評価においては，有意な差を見出すことができなかったが，投影法による評価については，回想法前に比べ，回想法後では反応の失敗（fail）が減少し，心の内側に生じる感覚を顕すとされる記号 m とより強い刺激への反応を示す記号 Fire が増加する傾向が認められた。(fail: Z=1.890，m: Z=1.778，Fire: Z=1.667，いずれも p<.10)

次にミュージアムでのプログラムの有効性を検証するため，グループセッション 10 回のうち，博物館のプログラムを取り入れたグループ回想法に参加した高齢者(10 人)と，博物館でのプログラムを実施しなかったグループ回想法に参加した高齢者（8 人）の効果について比較検討したが，有意な差は認められなかった。博物館での回想法プログラムの実施は，グループの活性化や，回想の質的変化に効果的であったと考えられるが，評価尺度を用いての効果検証には反映されなかった。評価尺度の適用については，今後の課題である。

なお，博物館の観覧によるリラックス効果を測定するために，唾液アミラーゼ活性測定キットを使用した。これは，唾液アミラーゼ活性の変化が，リラックス―緊張の指標になることから，測定を行ったが，有意な差は見られなかった。このような唾液アミラーゼ活性による博物館利用評価の試みの例はなく，今後更なる検討が必要であることが分かった。

（5）まとめ

本研究によって，子どもを対象にして開発した住文化学習プログラムは，良好な評価を得ることができた。また，留学生を対象にした和風文化体験の学習プログラムも，良好な評価を得た。大学生に対する学習プログラムは，建築系の学生向けであったので，課題が残った。大学生については，子どもや外国人留学生対象のプログラムを実施する際に大きな役割を果たすことが分かった。さらに，高齢者を対象にした回想法は，展示室に再現された伝統的な建物の中で行うことにより，より効果が現れることが分かった。しかし，生理的な評価は満足すべき結果が得られなかった。今後の課題としたい。

以上の具体的な実践と評価により，概ね，歴史系博物館において汎用性のある生涯学習プログラムが開発できたと考える。

５．主な発表論文等

（研究代表者，研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 2 件）

①碓田智子・谷直樹・他 5 名，タイアップイベント『むかしの住まいと暮らしの一日体験』の実践と評価―大学と博物館の協働による子どものための住文化体験型学習プログラム―，大阪市立住まいのミュージアム研究紀要・館報，第 6 巻，2008，pp.22－32，査読無

②原田智子・篠田美紀・曽根良昭・野村豊子・松島恭子，高齢者の心理的支援を考慮した住まいのミュージアムの活用の可能性―イギリス「回想法センター（Reminiscnce Center)」での取り組みを交えて―，大阪市立住まいのミュージアム研究紀要・館報，第 6 巻，2008，pp.39－44，査読無

６．研究組織

(1)研究代表者
谷　直樹（TANI NAOKI）
大阪市立大学・大学院生活科学研究科・教授
研究者番号：40159025

(2)研究分担者
曽根　良昭（SONE YOSIAKI）
大阪市立大学・大学院生活科学研究科・教授
研究者番号：60145802

篠田　美紀（SINODA MIKI）
大阪市立大学・大学院生活科学研究科・准教授
研究者番号：10285299

碓田　智子（USUDA TOMOKO）
大阪教育大学・教育学部・准教授
研究者番号：70273000